# 「それぞれの身体に宿る創造のきっかけ」
## ～スクール・オブ・ダンス　特別支援学級・学校での取り組みから～

プロのアーティストが横浜市立の学校に出向き、授業を通して自由な発想を導き、豊かな感性を育てる「横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム」。令和 3 年度は、横浜市のダンスフェスティバル Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021 と連動して「スクール・オブ・ダンス」として拡充した取り組みを 9 校で行いました。
実施校のうち、5 校が特別支援学級や特別支援学校での取り組みとなり、ダンサーたちは、通常の学校プログラムよりも長期で子どもたちと関わるなかで、子どもたち一人ひとりの身体と向き合い、その創造の扉を開いていく体験が重ねられました。
今回、特別支援学級や特別支援学校での取り組みを担当したダンサーたちが集まり、各現場で起こったことを座談会形式で振り返りながら、子どもたちと向き合うなかで考えたことを共有し、ダンサーが学校教育に関わることの意義や、担える役割について考えを深めました。その記録を、まとめました。
（スクール・オブ・ダンスの取り組み全体については、事業実施報告書をご参照ください。）

【日時】　2022 年 3 月 22 日（火）10：00～12：00
【会場】　ＳＴスポット
【登壇者】
アオキ裕キ（ダンサー・振付家／新人 H ソケリッサ！主宰）
黒田育世（振付家・ダンサー／BATIK 主宰）
白神ももこ（振付家・演出家・ダンサー／モモンガ・コンプレックス 主宰）
岡崎松恵（プロデューサー／NPO 法人 Offsite Dance Project）
【参加者】
愛智伸江（ダンサー）
北川結（ダンサー・イラストレーター）
木村愛子（ダンサー・振付家）
西篤近（ダンサー）
川井秀行（横浜市教育委員会事務局 特別支援教育課）
外山芳（横浜市教育委員会事務局 特別支援教育課）
中澤務（横浜市教育委員会事務局 小中学校企画課）
【進行】
高荷春菜、田中真実
（横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局／NPO 法人ＳＴスポット横浜）

## 子どもたちの選択を尊重する現場

**―まず、各学校での取り組みを振り返っていただけますか。**

**アオキ**　日限山小学校では個別支援学級（*横浜市では特別支援学級を「個別支援学級」と呼んでいる）の子どもたちが 15 名。全 6 回の枠組ですが、最終的には音楽家に来てもらって作品にしようと思っていました。自分は一人ひとりがどういう踊りを生み出すのかにすごく興味をもっています。最初に抽象的な絵を用意して、子どもたちが選んだ絵を、自分とアシスタントの西さんが踊って見せます。同じ絵なんだけど 2 人の踊りが違っていて、普段見るような流行りの踊りでもないというところからスタートして、「やってみる人」って言うと約 8 割の子どもたちが「はい！」って、いきなりハードルを飛び越えてゴールに行っちゃうみたいな。一人ひとりが、ほんとにおもしろいんですよね。次に二人組になって友達のダンスを観察して絵にしてプレゼントする。だけどそれがなかなかうまくいかないんです。個別支援学級の場合、自分の世界を広げるのは得意なんだけど友達と共有したり一緒に何かをしたりするのは苦手な部分があるのかなと思いました。結局は自分たちの踊りの絵を描いてもらうことにしたのですが、みんなすごくおもしろいのを描いてくれる。絵から踊ったり、踊りから絵にしたりして、一つの踊りの形になっていく。今回はマスクをつけないといけなかったので、紙を貼り合わせて動物の鼻や口のマスクを工作して「見たことのない生き物になってみんな踊り

ましょう」と。最終日の発表では、チェロの演奏に合わせて一人一人の踊りもあって、最後にノリのいいギターの音色と歌に合わせてみんなで踊ってわっちゃーみたいな感じで終わりました。踊りって、心と身体がひとつにならないと成立しない。まず心が「踊りたい」という気持ちになることを大事にして、もしそこで「身体を動かしたくない、自分ははじっこにいたい」って思うんだったらそれはその子の踊りなんで、その瞬間の自分と出会うことも大事。次に何をしたくなるのかっていうこともまた必要なことじゃないかなって思いながらやっています。

日限山小学校×アオキ裕キ

**黒田**　南小学校の個別支援学級の子どもたちとは 5 回あったので、クリスマスにちなんでひとつ舞台を作るというような気持ちで臨みました。音楽家の松本じろもお邪魔して、彼のギター演奏で子どもたちに歌詞を作ってもらったり、新聞紙で衣装を作ったり、クリスマスの絵をみんなに描いてもらったりと。それを最終日に向けてひとつにまとめていきました。お絵描きはイメージを可視化するので、それを土台にするとより具体的にストレートに身体を動かすことができますし、とても楽しいです。子どもたちは一人ひとりで自分の世界に入っていって深めていくことが非常に得意ですし、いい意味でつるまないところに深く感心しました。逆に誰かと一緒に没頭するということに不慣れであるように思いましたが、新聞紙で長いドラゴンをみんなで作った時に高揚感をみんなが共有した瞬間が見えました。苦労はけっこうありました。みんなで一緒にやる、時間の感覚を共有することなど、難しい点はありました。ですが、まず照れないことがありがたかったですし、評価をおそれず自分がもったイメージを膨らませていける非常に高い能力を皆さんもっていらしてとても感動しました。アオキさんもおっしゃっていたように、「今は参加しない」という子どもの選択を常に尊重できる状態でいないといけないと痛感しました。同じ空間にいてくれるだけでいい。自分が必ずしもいいことをやっているかどうか非常に不確かですし…。自分が何を差し上げられたかわからないですけど、ほんとにたくさんのことを教えていただきました。あと、1 年生から 6 年生まで縦割りで素晴らしいなと思う反面、どのような基準でこの学級に集まっているのかなと思いました。

南小学校×黒田育世

**白神**　豊田小学校の個別支援学級はアオキさんが昨年畑を耕してくれてた感じがあって（*アオキが令和 2 年度に豊田小学校の個別支援学級でダンスのワークショップを実施している）、かなり安心して行けたのはありがたかったなと思っています。私自身、子どもの頃「おはよう」って言われても 5、6 秒しないと「おはよう」って返せないタイプだったので、個別支援学級の子どもたちの独自のタイム感と似ている。今回 5 日間あったので、私はあんまり急がないことにしました。事前にプログラムは立てても、それをやってしまおうとすると結局のんびりした人たちと自分も焦らせてしまうから、目標はあってないようなものとしてやりました。初日はゲームをやる時間と言ってたんですけど意外と踊りたい子が多くて「あ、そうなんだ」と思って、次からは自由に踊ったりとか。音楽かけて「どうぞ」って言うだけで踊れる人たちだったので「お」と思って。1 人でソロがいくらでも踊れる子たちばっかりだったんですね。普通だと「このへんで」とかいって急いで切っちゃう感じがあるんですけど、長いなと思いながらみんなずっと見てくれてる。子どもたち同士でどういう特性があるかみんなわかってるのがすごいなと思いました。2 日目からは新聞紙を使って動いてもらったり、「1 位になる経験をしよう」とか言ってトイレットペーパーで作ったこよりのゴールテープを切るのをみんなで体験したり。それぞれの感覚で生きてるというのをすごい思ったのと、ルールを逸脱していくのが上手だったり、人のことを観察するのが得意な人たちだったなと思っています。最後は場面かんもく症の男の子が紙に「ダンス大好

白神ももこ

き」ってバンって出して、バーッと踊り始めて。あれ以上のダンス見たことないぐらい感動しました。あと、ワークショップのなかで「今のはおもしろくなかったのでカットで」って言ってくる子がいて、「わかりました、カットです、次から気を付けます」みたいなこともいろいろあって、私はおもしろかったなという経験でした。

## 「教育」という視点に触れて

―近年、個別支援学級の児童・生徒数が増加していると思いますが、横浜市の支援学級の状況をお聞かせください。

**外山**　横浜市立の小学校・中学校には、知的障害の個別支援学級、自閉症･情緒障害の個別支援学級、弱視の個別支援学級の３つが設置されています。入級に際しては、横浜市特別支援教育総合センターで相談をする必要があります。ふさわしい学びの場が個別支援学級と判断され、本人と保護者の同意のもとに入級が進められます。個別支援学級は、１クラス８名という定数です。個別支援学級の目的は、「一人ひとりを大切にする学級」です。児童生徒一人ひとりの教育的ニーズや困難さから１年間でどんなことを身に付けたいのか、どのような指導や支援を行っていくのか等を本人や保護者と丁寧に話し合って目標を決めていきます。そして、実践、評価を行い、次の目標につなげることを大切にしています。ここ 10 年で児童生徒数は増加していますが、その背景には、障害を理解することで児童生徒にとって適切な学びの場を考えること、「障害受容」の理解が進んだからからではないかと思います。

**岡崎**　実際に個別支援学級といっても、各校で状況は全然違うんですね。日頃の学級づくりとか風土が影響するし、先生と子どもたちの間で培われた関係性もあって、外部から行く私たちには予測できないことがある。なので、集中したワークショップが行える環境づくりを、やりながら先生方と一緒に整えることが常です。例えば、先のことが見通せないと活動できない子どもたちもいるとのことで、最初にやることを明示したりとか、最後に振り返りを行うことで次の意欲につなげるとか、などの工夫も必要だと思いました。

**北川**　豊田小学校でアシスタントとして務めたんですが、先ほど黒田さんが「何が正解かまだわからない」という趣旨のことをおっしゃっていたことに関して、同じ思いを持った瞬間がありました。進行上「一列に並びましょう」って言った時に、たぶん先頭をやりたかった子がいて、途中でぴょんって横に出たんですよね。先生たちはいい意味できちんと並ぶように積極的に助けてくださっている中で、こちらとしては心のどこかで「全然一列じゃなくてもおもしろいな」って思ってる自分もいて。教育的な指導と、瞬間的に見つけたおもしろいものとの狭間で心が揺らぐことがありました。

**黒田**　結局こちらはやり逃げのような形になってしまってもおかしくない。荒らすだけみたいになっちゃうのは非常に嫌だし、皆さんには日々大切にされていることがあって、私たちの活動はそこから逸脱するわけだけれどずっと見届けてあげられるわけではない。そういう立場で何が正解かわからなくなるときがあるんですよね。

黒田育世

**外山**　今回、豊田小学校では、アーティストさんとの授業を体育科で設定していました。学校としては、体育科の 1 時間の授業で「こんなことを育成したい、こんなことができるようになってほしい」等、授業のねらいと先生方の思いがあります。一方、アーティストさん側にもこの 1 時間で「こんなことをやってみたい」という思いがあると思うので、事前に学校側とこの授業で何を目的とするのか、どんな子どもの姿を目指すのか、具体的な支援等、丁寧に話し合うことが大事なのかなと思います。

**岡崎**　そのあたりはコーディネーターの役割だと思っています。もうひとつ、今日参加されていない森下真樹さんが担当された平安小学校の取り組みもご紹介したいと思います。個別支援学級 30 人の子どもたちとの 5 日間。森下さ

平安小学校×森下真樹

んは事前に子どもたちに自筆の手紙と質問カードを送ってるんですね。「好きな食べ物を教えて」、「今はまってることを教えて」とか。通常は当日初対面になるんですが、互いの距離は確実に近くなったと感じます。森下さんのワークは、音楽を多用して日常のできごとを振付にして動いているうちにいつの間にかダンスになっちゃうみたいな楽しさがあります。みんなが大好きだった「月のダンス」があったのですが、国語で月に関する詩を取り上げてくれたり、アーティストへのお礼のお手紙が月の絵と言葉で綴られた冊子になっていたり、日々の教育活動につなげてくれた先生方のおかげで、すごく豊かな体験になったと感じています。

## 手話、ダンス、心のなかを外に表すこと

―ろう特別支援学校は横浜市芸術文化教育プラットフォームとしても初めての試みとなりました。プログラムで工夫されたことや感じたことをお聞かせください。

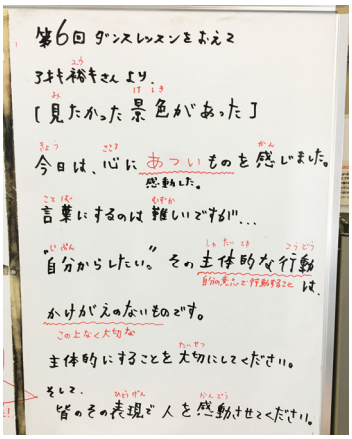
**アオキ**　当初担当の先生は流行のダンスを子どもたちに体験させてあげたいと考えていたようですけど、でも自分はみんなそれぞれ自分のなかにある生きるリズムだったり言葉のリズムだったり手話もリズムがあるかもしれないですし、そういうリズムが外に出てくるのがいいのかなという考えで臨みました。高等部の子どもたちが 31 人いて、コロナで期間や時間短縮もあって、全 9 回各 45 分授業。3 分の 1 が 3 年生で卒業して社会に飛び立ってしまう。そこで何をやるのがいいのかなと考えて、チェロとギターとスティールパンの 3 人の音楽家と向き合って最終的にグループでの発表をやりたいなと。単刀直入に言うと、みんなすごい自分のリズム、自分の間を持っていました。手話はいわゆるボディランゲージで心の中が外側に出てくる動きなので、何か感じ取るものを形にすることをできるんですね。自分の予想をはるかに超えたものを表現する子どもたちでした。プログラムとしては、最初は 1 人で踊りを作る。次に人と出会ってグループに展開するんですが、このコロナで人と人の間にある距離をすごく感じるようになって、人と触れ合うワークに難しさを感じてしまって何かクッションがないかと。個人が殻をもっていて隠しながら社会に依存をして生きていて、その社会が機能しなくなったときに怒りだしたり不安に陥ってどうしたらいいかわからないような人がすごく増えていると感じている。そこで、人と人の間にある何か見えないものに気づくようなアプローチとして、相手が動いたら自分も動く、誰かが止まったら自分も止まる。動きの主導は誰でも良くて、1 人が動いたらみんなも歩くとか、誰かが止まったら自分も止まる。ただそれだけなんですけど、そこにすごく意味があるのかなと思ってやってました。自分たちが音が聞こえて便利に過ごせて当たり前と思っているものがそうじゃない部分がたくさんあって、見えないものも聞こえてないものもいかに大切にするか、そういうものを大事にして人と触れていく必要性を感じさせられるような子どもたちでした。

ろう特別支援学校×アオキ裕キ

**西**　僕はアオキさんのアシスタントとして参加したんですが、まず耳が聞こえないという障害で人に対してコミュニケーションの最初の垣根はもう超えてるんだと感じました。必ず目を見るんです。そうして自分から伝えたいことは表現をしないと相手に伝わらないのでそこの高いハードルをすでに超えている。人生の障害といったら大袈裟ですけど、何かの障害が起きることによって、代わりの何かがそれぞれに備わるのかなって感じました。ちょっと話は変わるんですけど、僕は元自衛隊員で、自衛隊の夜間の行動で手信号というのがあるんですが、絶対間違った動きはできないんですよ。ですけど手話って思ったより絶対的なわけじゃない。確実にこの動きをしないとダメとかじゃないんです。僕は手話はできないんですけども意思疎通はできる。こっちのことよく見てる。だから僕も相手のことしっかり見て何か伝えれば伝わるというのはすごい感じましたね。それと、今回は学生たちが「自由にやれるか」というハードルもあった。初日に「新人 H ソケリッサ！」のおじさんたちの謎のパフォーマンスを見て「ぽかん」だったと思うんだけど（笑）、回を重ねるごとにアオキさんが伝える「自由にやっていい」ということが受け入れられていく。彼らが成長して楽しんでいく姿がすごい印象的で、可能性はいくらでもあるんだなと感じました。

**木村**　私もアオキさんのアシスタントとして参加しました。動きのキャッチボールをしたときに、目の前の相手が、どういう質感をもってどういうことを心のなかで言おうとしてこの動きを出しているのかをちゃんと見ている。目に見えるものだけじゃなくて、目に見えないものを捉える力がすごくあると感じました。普段のコミュニケーションのなかで私たちは、話されていることを聞こえるからって情報として受け取るだけじゃなく、目の前にいる相手がどういうオーラをもっているかということを、今一度見ていかなくちゃいけないな、ということを学ばせていただきました。

**岡崎**　毎回体育館の入口に先生のメッセージが書かれているんです。例えば、「第５回のレッスンを終えて、アオキさんより。人に触れることは特別なこと、丁寧に優しく動きを感じて、自分の感覚を、そして人の感覚を大切に。」先生から。「ダンスを通して、人を通して生きるうえで大切なことを学びました。日常とダンスは分けなくていいってこのことかと思いました。」教育と自分たちのやってることの繋がりが見えなくなる時に、先生がこうやってフォローしてくださるとほんとに意味があると感じられるんですよ。すばらしい先生でした。




**アオキ**　先生たちの愛情が子どもたちのベースになってるからみんな自由にできるのかな。普段を想像できました。否定されてないんですよね。

**川井**　私は４年間ろう特別支援学校で聴覚障害のある子たちと一緒に過ごしてみて、人間関係の基本となるコミュニケーションの部分に障害があるのは私たちが思っている以上に孤立を深めてしまうことだと実感しました。ろう学校では見るっていうことが大事にされていて、話している人を見て話を聞きなさいとか、徹底されてるんですね。ダンスは視覚的な要素も強いからだと思うのですが、ろう学校の子どもたちはダンスが大好きです。今回、私は授業を見られませんでしたが、私が思うダンスよりもっと自由な表現だったようですね。普段から手話など自分たちのなかに内在する言葉や思いを身体を使って表現している人たちですが、ダンスを通してさらに彼らの表現を引き出していただいてほんとにありがたいなと思っています。将来社会に出てコミュニケーションの難しさとかそういうことにぶち当たったときに、なかなか言語化できない自分の中のモヤモヤっとしたものや思いをダンスという手段で身体表現した体験が、根っこの部分で彼らにいい形で作用するのではないかと感じました。

## アプローチの試行錯誤

―ワークショップの中で絵を媒介にするという話が出ましたが、音楽についてはどのように扱っていますか。

**黒田**　私は夫婦でやっているので、話が早いので松本じろに音楽を頼んでいます。童謡のようなっていうんですかね、難しい音楽を彼は作らないのでワークショップには非常にありがたい。彼自身が人のおもしろさみたいなものを奏でるミュージシャンなので安心して任せています。

**アオキ**　いかに異世界に連れていくかっていうのを大事にしてます。子どもたちが普段出会うことのない場っていうのかな、そこに導くのはアーティストの役割だと思うんだよね。チェロの方とかとよくやるんですけど、要はリズムがないので、どういう踊りでも合う。演奏家なので合わせたりとかずらしたりとかその場でダイレクトにやりとりできるので生演奏がいいなと思っています。

**白神**　一緒に音を出してる人がいる空間は全然違うなと思っています。逆に今回の豊田小でのように音源をスピーカーから出すときは、じゃまにならない音を使います。逆に一瞬だけノリをよくするためだけに使ったりもします。

―ワークショップで大事にしていることはなんでしょう。個別支援学級と一般級で違いがあれば教えてください。

**アオキ**　基本的には個人の踊りを生み出すアプローチで絵を使ったり言葉を使ったりとかは変わらないですね。でも年齢によっては変えますね。さっきの絵じゃないんですけど、勝手に踊ってもらってもいいんですよ、ある意味で。自由に踊ってもらってそれでワークショップが終了するならいいんですけど、でも何かないと自由って言われても自由っていう振付を踊っているということにもなる。だから新聞紙でも絵でも素材がとっかかりとなって、こういうふうにやろうかなとか、これよりも自分はもっと適当にやりたい、こうやりたいとか何かそこから発展していくということが自由ということだと思うのです。ある意味不自由を知らないと自由と呼ばれないので。たくさんあっても逆に難しいので、ほんとに小さいポイントだと思うんですけれど、そういうのを提供するのが大事かなと思いますね。

西篤近、アオキ裕キ、黒田育世

**黒田**　私は小学校の個別支援学級では今回初めてで、一般級とはやり方を変えました。子どもたちも先入観としてダンスを「興奮してやるもの」って思ってるふしがある。だけど冷静に何を今やるかっていうことがわからない限り、興奮も的外れな、しぼれてない、ターゲットのない興奮になってしまう。一般級では私はすごく冷静に進めていきます。それをどのように高揚につなげていくのかっていうことが大事。ただ個別支援学級では冷静さよりも、大きい声を出すなどして現場の体温を上げなければいけない瞬間が比較的多かったなと思います。

**白神**　昔は私あまりワークショップ得意じゃなくて、ドキドキしながらブルブル震えながら行くみたいな。「ちゃんとしなきゃ」と構えていたからなんですが、年月を経てちゃんとすることはできないということがわかってきた（笑）。で、現場で他の人たちの声がけやそのタイミングなどを見て学ぶことが多くて、ほんとに経験だなと思いました。

**中澤**　ダンスって同時性とか場とか空気みたいのを感じながらやらないとできないものなんだなということや、いろんな芸術との親和性がすごく高いんだなということや、あるいは子どもやいろんな人を引き付ける力が相当強いんだなと思いました。今のお話を聞いていて、ほんとに一人ひとりを見ながらやられてるんだなということや、学校のこともよく見てらっしゃるなというのがおそろしいくらいで。それはやっぱり外から来た人が学校をどういうふうに見たかということも通して、先生方も「自分の学級づくりはこうだったんだな」と気付かされることになると思います。先ほど「やり逃げ」というお話もあったけども、でも何日間かそこでダンサーが過ごされた後は絶対違う何かになっているから、子どもたちがそれを思い出しながら何かまたやろうとするから、やっぱり学校教育のなかに芸術を入れていく仕組みはほんとに尊いなって思いました。

## 特別な体験、学校の外に共有していくこと

―今年度の「スクール・オブ・ダンス」をコーディネートする中で工夫や苦慮されたことはありましたか。

**岡崎**　DDD（Dance Dance Dance ＠ YOKOHAMA）開催年は、3 年に一度、アーティストが子どもたちと長期で関わることができる貴重な機会なんです。だから子どもたちにとって特別な時間となるような出会いを作りたいと思って、信頼できる 8 人のアーティストに担当していただきました。コロナの影響で期間短縮もありましたが、10 月から 2 月まで 9 校で 50 日間 549 人の子どもたちが参加しました。「スクール・オブ・ダンス」は公開性も一つの特徴で、師岡小学校では近隣の港北公会堂で最終発表を行いました。3 年生 5 クラス 210 人、大規模校ゆえに文化活動の機会が限られているとのことで、DDD の枠組を最大限活用した形でした。保護者など約 250 名が参加、地域の公共ホールと教育機関との良好な関係づくりになったかと思います。校内で公開授業を実施した太田小学校では、他学年の子どもたちが参加してくれました。

**愛智**　私は太田小学校の 3 年生 2 クラス 45 人、中村恩恵さんのアシスタントとして 6 日間務めました。先ほどおっしゃっていた「不自由さがあるから自由がわかる」と同じように、「規制があるから自由をやっていい」という意味で規制の部分がすごく大変な印象を受けた学校でした。中村さんも私もクラシックバレエからコンテンポラリーに転向したので当初は自由な表現をイメージしていたんですが、逆にバレエの決まり事を学ぶ方向に変更しました。クリスマスが近かったのでくるみ割り人形というテーマに。最初と最後のごあいさつで、「気を付け」といっても空気が変わらない時間がすごく多かったので、あの中村さんの雰囲気で「何に気を付けているんですか？」って言ったときにシーンとなったりとか（笑）。ルールというか決まり事を学ぶためにバレエを扱うのは、私にとっても初体験でした。

**岡崎**　最終日の公開授業で、中村さんからダンスのプレゼントがあって、最後のお辞儀（レベランス）が美しかった。他者への敬意を表わす動きとして何度も稽古した子どもたちは、自分たちがやってきたことの本当の意味がわかったと思います。学校プログラムは基本非公開なので、なかなか伝えることが難しい。今日のような集まりでもない限り、アーティスト間でもワークショップの内容は共有されていないんですよね。最近は写真撮影も難しくなっていますし、今回イラストレポートという形で残すことにしました。ご出席の北川さんと中村理さん、ダンサー＆イラストレーターのお二人がいたから実現しました。冊子とオンラインで公開しますのでご活用いただければと思います。

---

長期で子どもたちと関わるなかで、ダンサーならではの感性で子どもたちを受け止め、やり取りをしながら、一人ひとりの創造のスイッチを丁寧に探る試行錯誤が展開されていたこと、先生方との考え方や価値観の交流が生まれていたことを共有いただき、アーティストが教育に関わることの可能性を皆で再認識する機会となりました。こうした実践、またそこから関係者のみなさんそれぞれが考えたことのなかに、はっとさせられる言葉がたくさん聞かれました。今後も丁寧に実践を重ね、学校の先生方、アーティスト、コーディネーターなどとともに、これからの教育のあり方を探っていけたらと思います。ありがとうございました。